

「地域コミュニティ再生プラン」
中町内会（長岡市来迎寺元町）

絆

2004. 10. 23

中越地震を起源とした
町内のコミュニティ



越路原の閑静な古里をブルーシートが覆った。
2004年10月23日17時56分M6.8
そのとき町内の仲間は。

地域コミュニティ再生プランの 作成にあたって

中越地震で我が家は全壊でした。復興に向けてしばらく小千谷市内に住んでいる息子夫婦のところに同居しながら、町内では早朝から毎日ごみステーションで監視をしておりました。

そこで町内の多くの皆様から地震の恐ろしさ、後片付けの大変さ、困難を極める復興作業などたくさんのお話を聞くことが出来ました。「このまま終わってしまっただけいけないことだな」と思ったのが本計画のきっかけでありました。また、元町の中でも一番被害が多かった中町内として、「再生プランを作成し、後世に残したい」と相談すると、宮川、深井両協議委員から同意を得ました。そのうえで、平成18年3月の常会で発表させていただき、地震から満2年後、記事投稿を依頼したところ、たくさんの方々からご協力いただき、この「再生プラン」の発行にこぎつけることが出来ました。町内の皆様に厚く御礼申し上げます。

この地震を体験したことで近所の絆、町内の絆の大切さを身を持って体験し、自己本位の考え方から脱皮するきっかけになったこと、支援物品、義援金、近所の優しい言葉掛けなどに改めて感謝していること、この経験をとおして各々が成長できたことが表現されています。このことは「再生プラン」の一つの成果でもあります。同時に復興に向け、町内全家庭が努力し、頑張られたことに心から敬意を表します。

一生にあるかないかの大地震を体験したこの「再生プラン」を、いつまでも子・孫の代を含め末永く大切に残していただくことを希望いたします。今後とも、中町内がより一層結束され、発展されることを希望します。

最後にこの編集に携わった協議委員の2人と特別委員になってもらった永井紳一さんに感謝し、発刊にあたっての言葉にかえさせていただきます。ありがとうございました。

平成19年3月吉日
来迎寺元町
中町内会長・永井栄弘

1、中越地震以降の町内の現状分析

当町内はH16年10月の中越地震では、来迎寺地区で一番大きな被害が発生した地区で、町民は大きな衝撃を受けた。翌17年1月のさいの神は中止せざるを得なく、益々町民は精神的に落ち込み、しかも、永年にわたり町内会長された前会長は地震の疲れで17年3月末退任され、我々新役員の体制が発足した。その後一年間、新役員は今までのお祭りは何とか実施したが、町民は地震の復興作業などで盛り上がりず、低調に過ぎた。たとえば常会など会議の出席率の悪さ、祭りなどの参加人数の少なさ等、自分本位の考え方にならざるを得ない状況だった。それを打破するため、町内の再生に向けプランを企画することとした。(具体的には別添資料のとおり)

2、現状分析に基づく当町内の目標

- (1) 何事にも前向きに考える町内であってほしい。
そのため中越地震時の町内の炊き出し、声かけ、ボランティア活動の有難さ、支援物品の配布のうれしかったことなどの意見を書き出した。
- (2) イベントの復活や、新規行事を計画する。
町内のコミュニケーションの場の大切さを認識してもらう。
- (3) 役員自らが研鑽・努力し、町内活性化のため問題提起する。
- (4) 町民の能力、技術、現役時の仕事の経験を生かし、各種企画、行事への分担や、参加依頼などを心がけ、参加することで満足を得られるよう配慮する。

3、H18年度の計画と実行内容

- ①さいの神を再建し、盛大に実施する。
H17年・中止
H18年・わらの調達困難の中で小規模で実施。
H19.1.14・農家の協力を得て、自前でわらの取り込み、乾燥、積み込みを住民の協力を得て実施。全員参加を呼びかけ盛大に実施できた。
- ②「地域コミュニティ再生プラン」を作成し、町内90軒へ全戸配布する。

4、H19年度再生プランの概要

- ①中越地震写真展
- ②盆踊り大会を復活する。

5、H20年度の計画

- ①地震による家屋取り壊し跡地を利用し花いっぱい活動をする。
- ②納涼会の開催する。

6、その他

- ・ バーベキュー大会、椎茸、なめこ栽培などで若い仲間の連帯を図る事業。
- ・ 老人会行事の活動への尽力。
- ・ そのほか運動会、グランドゴルフ大会、駅伝、スノーフェスティバルなど、支所、元町全体の行事などへの参加拡大をめざす。

中越地震の概要

1、地震発生の経過

平成16年10月23日17時56分頃、新潟県中越地方の深さ13kmでM6.8(暫定値、以下同様)の地震が発生し、この地震により、新潟県川口町で震度7、小千谷市、山古志村、新潟県小国町で震度6強、長岡市、十日町市、栃尾市、越路町、三島町、堀之内町、広神村、守門村、入広瀬村、川西町、中里村、刈羽村で震度6弱を観測するなど、東北地方から近畿地方にかけて震度1から5強を観測した。また、同日18時11分頃、M6.0、18時34分頃にM6.5の地震が発生し、いずれも最大震度6強を観測した。(気象庁報道発表資料より)

2、越路町の主な地震震度

・10月23日	17時56分頃	震度6弱
・10月23日	17時59分頃	震度5弱
・10月23日	18時03分頃	震度5強
・10月23日	18時07分頃	震度5強
・10月23日	18時11分頃	震度6強
・10月23日	18時34分頃	震度5強
・10月23日	18時57分頃	震度4
・10月23日	19時36分頃	震度4
・10月23日	19時45分頃	震度5弱
・10月27日	10時40分頃	震度5強
・11月4日	8時57分頃	震度5強

3、越路町の被害状況(主なもの)

人的被害

死者数	負傷者数
1人	93人

建物の被害

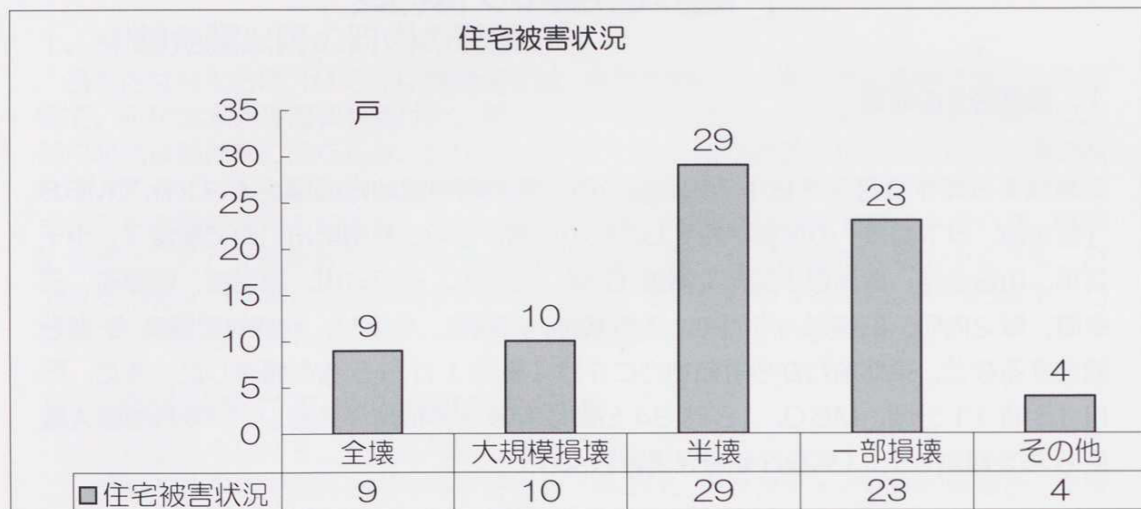
全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	計
149棟	120棟	681棟	2,647棟	3,597棟

ライフラインの被害状況

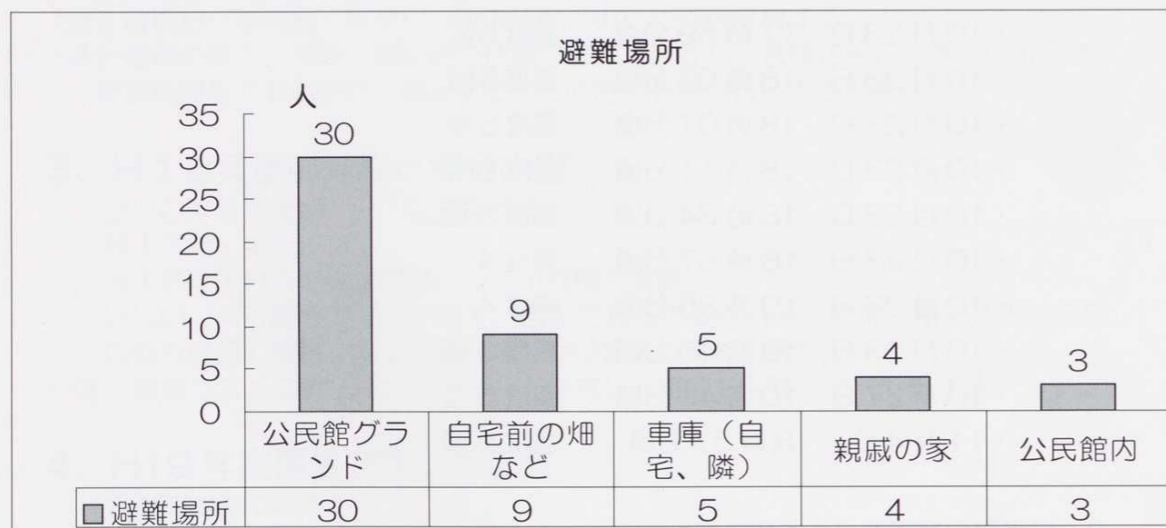
電気	都市ガス	水道
4,051戸 停電	3,975戸 供給停止	5,380戸 断水

アンケートから

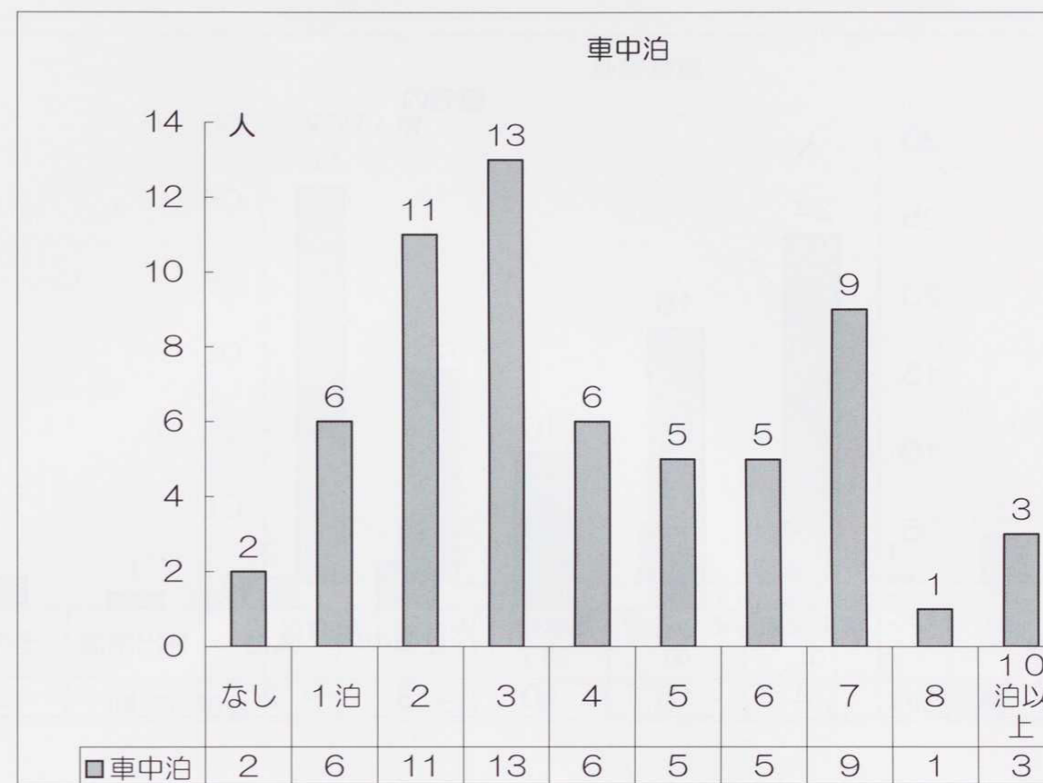
1. あなたのお宅の被害状況はどうでしたか。



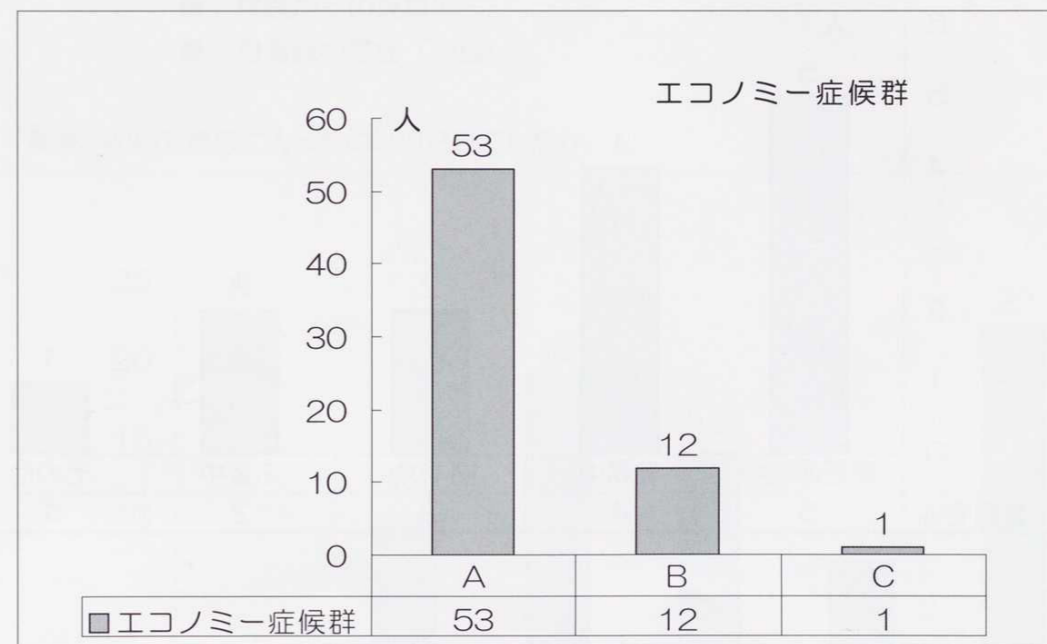
2. 一時避難所（寝場所）はどこでしたか。



3. 車の中で何泊しましたか。



4. エコノミー症候群は大丈夫でしたか。

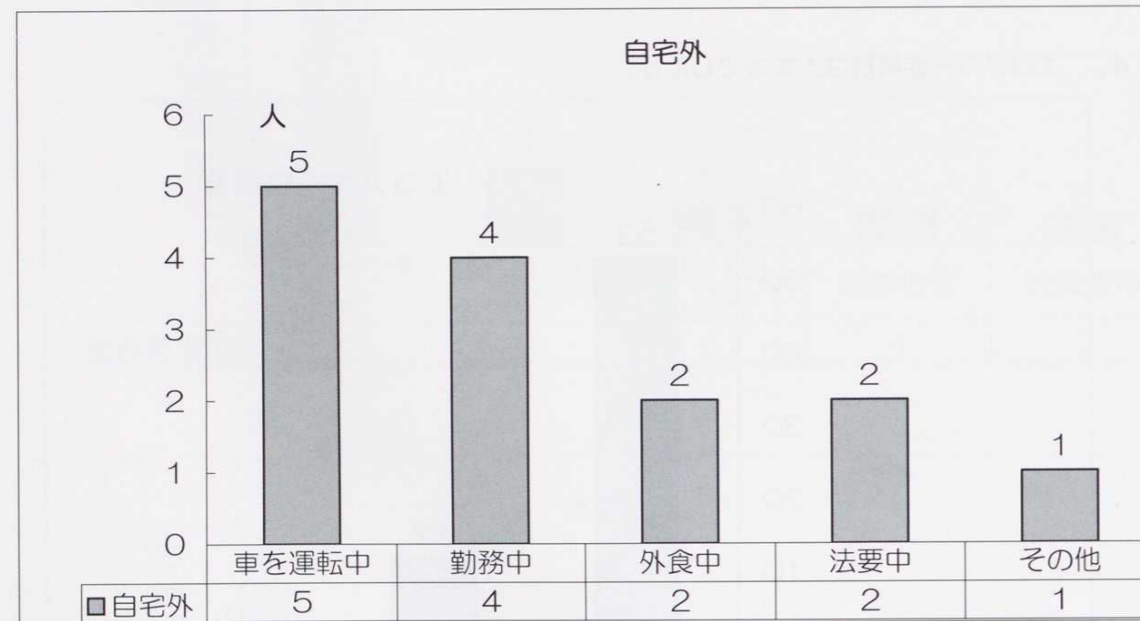
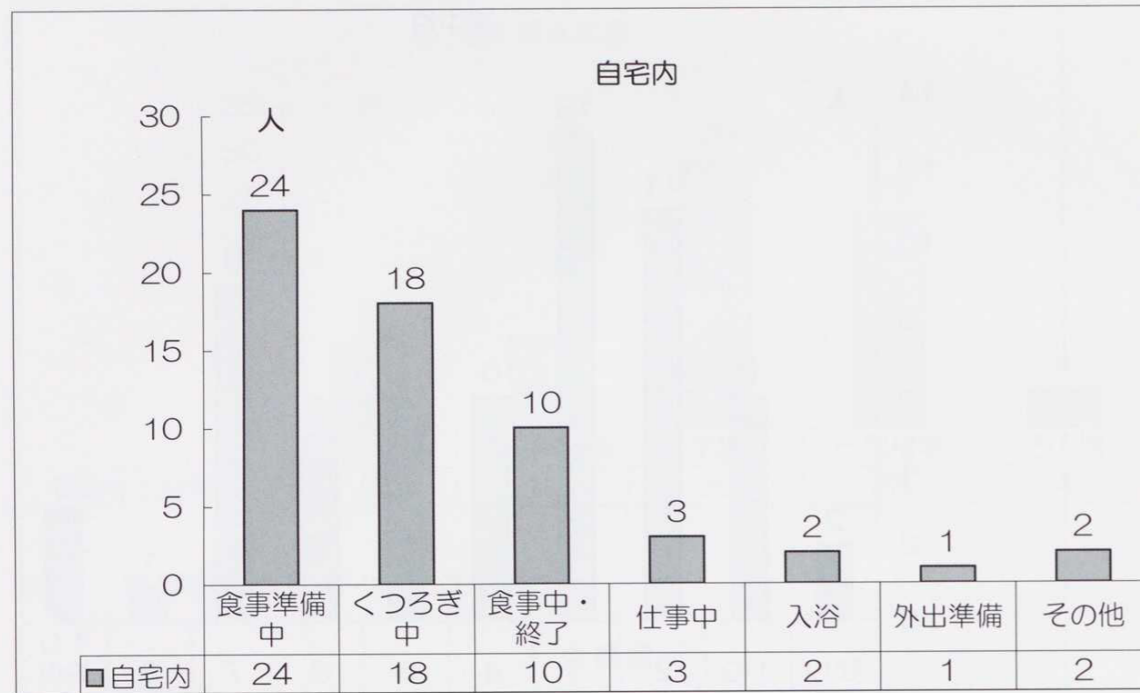


A 気にならなかった B 朝、足がふらつき気分が悪くなった C 医者にかかった

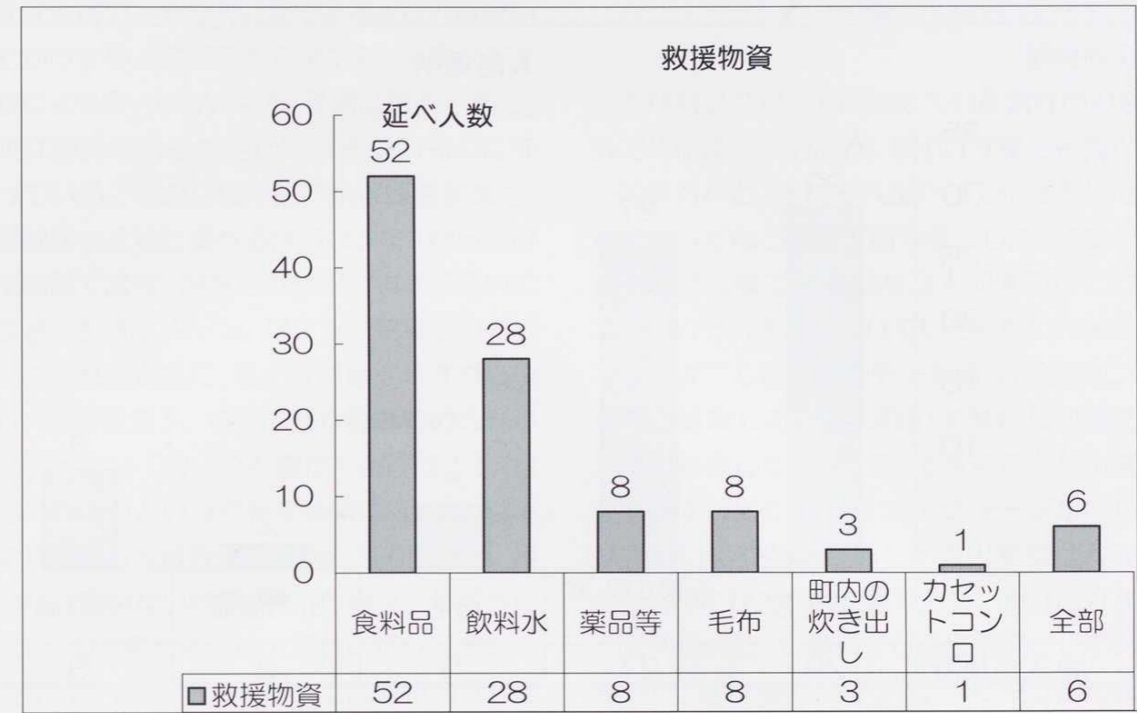
5. 本震のとき自宅にいましたか。

- 自宅内 57人（居間、風呂、台所、工場など）
- 自宅外 16人（車中、近所の家、職場、親戚の家など）

6. 本震のとき何をしていましたか。

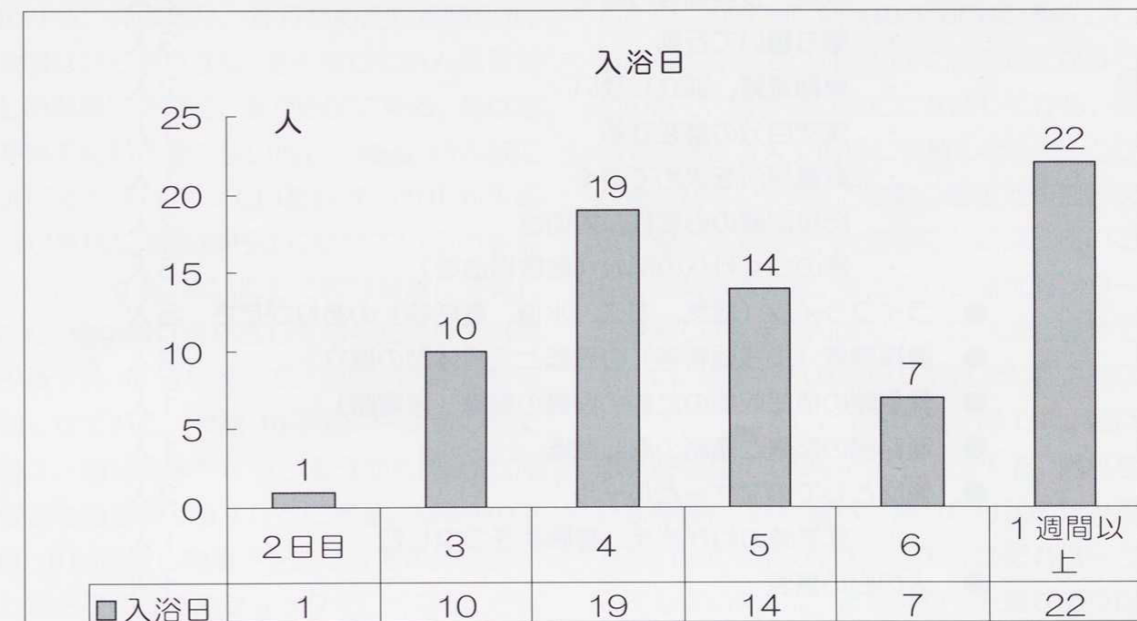


7. 救援物資（心）でありがたかったことはなんですか。

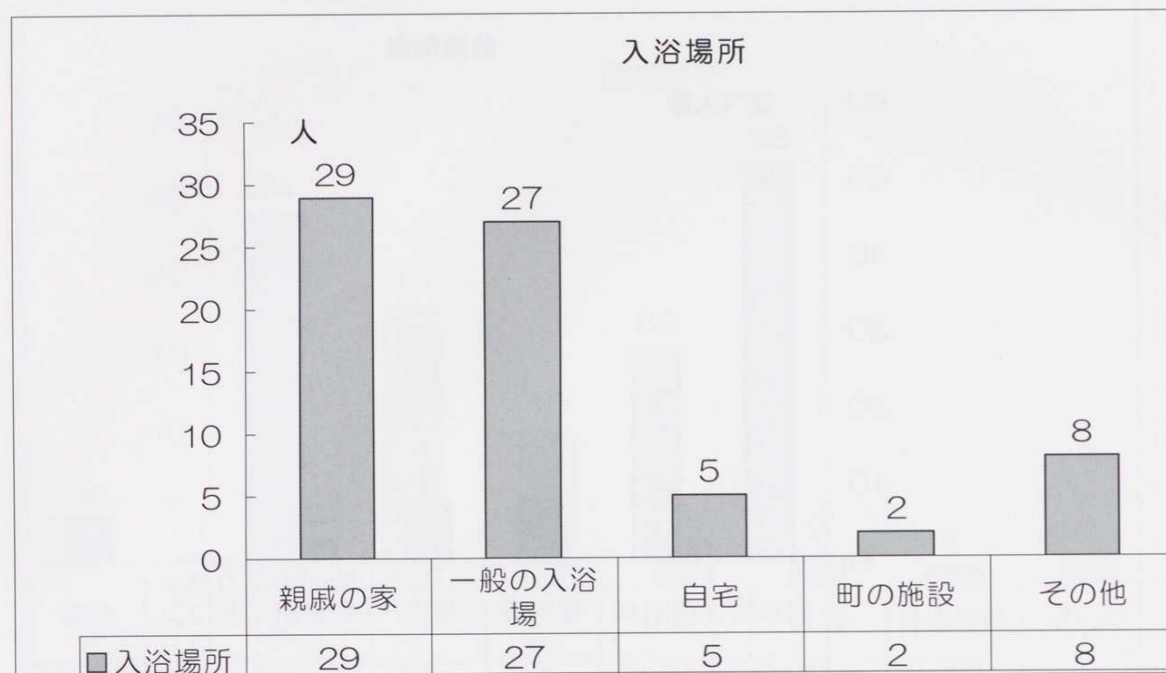


- (心 情)
- 近所の人々の助け合い
 - 町内会長、隣組長の心配り
 - 親戚からの見舞い
 - 自衛隊の存在（心強い）

8. 震後、初めて風呂に入ったのは何日目でしたか。



9. 初めての風呂はどこで入りましたか。



10. この地震で得た教訓は何ですか。 (延べ人数)

- コミュニティー (地域社会) の大切さ
 - ・ お隣、近所の大切さ、ありがたさ 協力 32人
- ふだんからの備え (物心両面から)
 - ・ 非常持出し品の整理整頓 (重要書類等) 15人
 - ・ 懐中電灯、ラジオ、食品等の常備、点検 9人
 - ・ 家具、食器棚等の固定 2人
 - ・ 落ち着いて行動 3人
 - ・ 早期避難、孤立しない 2人
 - ・ まず自分の身を守る 1人
 - ・ 避難場所を決めておく 1人
 - ・ 防災訓練の必要性、大切さ 2人
 - ・ 家のつくりへの関心 (耐震構造等) 3人
- ライフライン (電気、ガス、水道、電話等) のありがたさ 5人
- 要援護者 (災害弱者等) の確認と支援体制の確立 2人
- 緊急時の情報収集のための設備の整備 (停電時) 1人
- 連絡網の整備と連絡の周知徹底 1人
- 集団としてのマナーとルール 2人
 - ・ 非常時のわがまま、身勝手をつつしむ 1人
- 人の心の裏表 1人

アンケートは、75軒のみなさんからご提出いただきました。ご協力ありがとうございました。

深井英一

この世の中で一番恐ろしいものといえばまず地震で、その次は雷である。これは思いもかけずやってくるからである。火事は不注意によるか、もらい火で、予測は可能である。次は親父であるが現代で一番弱いものになっている。その日は早めに晩御飯を済ませ、妻はゆっくりと食べるほうなので、自分だけ茶の間で満腹、満腹とコタツの中で横這いになる。途端にドーン、ボタンと茶筆等のガラスの割れとともに、私のすぐ眼すれすれに倒れ、時計は落下、神棚の飾り物はもの見事に吹っ飛び「おーい地震だ！逃げろ！」と、出入口の戸という戸を全部開けた。玄関は下駄箱がひっくりかえり、中のものは散乱。足の踏み場もない状態。跨ぐも漸々にして外に出る。前の家の妻梁は大揺れに揺れて今にも梁が落ちそう。直ぐ飛び出せば屋根の瓦が落ちてくるやもわからないので、玄関の庇の下で様子を見る。

電柱と電線は大揺れに揺れて、いまにも折れそう。妻の手を取り変電所脇を通り、田んぼに出る。もう人はイッパイ。腰を下ろす場所もないほど「おーい鉄塔の近くは危ないぞう！倒れてくるかもわからんぞー！」と声を掛ける。外は光々、寒月があたりを照らす。余震ははっきりなし。そのたびにみんな重苦しい悲鳴をあげる。家が心配になる。俺は家を見てくると妻に言い残して帰る。田んぼに逃げるときは立っていたはずの丸山先生の塀が無残にも跡形もなく倒れているを見て愕然とする。幸いにして家は倒壊こそ免れたが、懐中電灯をかざして落ちた時計の針は午後5時56分を指して、地震のおきた時を知らせていた。隣組10戸の中、3軒が建て替え。自分の家もどうしようかと迷ったが、愛着もあるので直すことにする。大黒柱の下は10cm陥没し物凄さを語る。妻の仲の良い友達もこの地震のショックで亡くなる。ご冥福を祈りながら筆を止める。



駒村裕子

10月23日、夫は勤めていた会社のOB会で片山津へ泊旅行。息子は同僚と福島へ泊旅行へと、それぞれ出かけて行きました。後に残った私と愛犬が留守番でしたので、夕方お友達の家で夕食会を3人ですることとなり、いそいそと出かけていき、楽しい夜となるはずでした。お酒を一杯飲んだ途端に、今まで経験したことのない未曾有な地震に見舞われました。ただ何にもすることが出来ず、身体が左右、上下に揺れ、テーブルにしがみついても立ち上がることも出来ませんでした。がたがたと物が倒れたり、割れたりする音や揺れに、地震のすごさに呆然としていました。納まるのを待って、外に飛び出し家に愛犬だけ置いてきたので心配で足をかくがくさせながら家に急いだけれど、家の前の道路が陥没していて、けつまずきながらも真っ暗な家の中へ。犬の名前を叫びながら探したら倒れた家具の間から、くんくん泣きながら出てきて、無事でうれしくて涙が出ました。また、地震が来る中、犬を連れて出ようとしたら、かすかに電話のベルの音が聞こえ、出たら夫からで、何回掛けても通じなかったとの事で、無事でいることを話してから、急いで友達と3人で広場に避難しました。どこか遠くから、ラジオで地震の震源地や被害状況が聞こえてきて、大変なことになっていることを知りました。夜もふけ、福祉センターに避難し、住吉さんのマイクロバスに載せてもらい、お茶やハムをいただきました。おなかがすいていることも忘れていました。寒い思いをしなくて少しホッとしました。眠れないまま朝になり、家へと帰ったら足の踏み場もないほどに物が倒れ、割れ、ただ11泊としてしまいました。また何回も余震があり何も手につきませんでした。夫や、息子へ連絡が取れ、帰ってくる時に食物や飲み物、ガ

スポンベ等必要なものを買ってくるように頼み、無事帰ってきたのは2人とも翌日の5時頃でした。途中山崩れや、道路が傷み、いろいろ倒壊して大変だったようです。ガス、トイレ、水、電話、何にも使えなくて、自然の災害の大きさにただなすすべもありません。いざとなると自分は何にも出来なかったことが悔やまれます。町内の役員の方や、隣組長さん達が一生懸命やっていただき、みな協力があってこそ乗り越えられたことと思います。



永井辰英

写真業務に携わっているため、直後の各種証明用と思われる写真依頼が多い中、お客様と、その様々な考え方の違いに対応し戸惑いを感じました。立派な家に住み、裕福と思われる方が、わずかな損壊でも天災だからと、自治体で修理費を負担すべきと声を大に。その反面、大損壊の家にお住まいの老ご夫婦の方。天災なのだから仕方がない、もっと大変な方が大勢いるんだから。と謙虚な平常心で話され、少し心が和んだことでした。何が起きるか分からない世の中だからこそ、体にも心にも良い、無理のない生き方が出来ればと思う次第です。

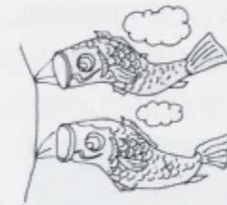
佐藤千恵子

10月下旬、そろそろコタツの準備と、布団や敷物を2階から運び終え、1階の居間にいたときでした。

「あっ！地震！！」いつも直ぐに納まるので“またか”とたかをくくったものの、これでもかと、これでもかと来る異常な大揺れ。本棚や額が倒れ、ガラスが割れる音。家どころか自分も“もうだめだ！”と思った瞬間でした。台所で火を使っていたので、まず火を消さないと思い、「火消して！」と主人に

頼み（自分が動かず・動けなかった）ながらも、一瞬でも一人になることが恐怖でした。

今思えばあの時一人だったらどうしていただろうと考えてしまいます。何回かの揺れの後、外でざわめく音。ただ事でない事態に何も持たず、玄関の引き戸が倒れ、割れたガラスの上を通ったらしいが怪我も無く外に飛び出しました。近所の人たちの顔を見て、会話すると心強く、気も紛らわすことが出来ました。また、豆炭ゴタツ、シート、薪などすばやく段取りがよく、とても有難かったです。そのとき戴いたうどんの味は忘れられません。何枚かの資料の作成や配布など町内役員さんや、それぞれの班長さんのご苦労も忘れてはならないし、近所や地域の方の有難さはもちろん、親戚からの食事や物資など大変助かりました。また、家族の協力、子供たちが頼もしく感じられた出来事でもありました。普段からの整理整頓。よく考えて物を買うこと。（あとで不要なことが多いので）当たり前ですが改めて考えさせられました。



永井又一

地震のとき私たちは2人でした。若夫婦は転勤にて東京におり、この怖さを知らずにすみみました。茶の間にて電話中にガーンときて受話器は下に落ち、玄関の戸は外れ、壁が落ちてきて外に出るのが大変でした。空き地に集まり近所の人が無事のことを知りました。車に1週間泊まりやっとならぬ中で落ち着いたものの、何処から手をつけたらいいのか？第一に屋根を瓦からトタンに替えて、風呂、台所、家の中の戸を取り替え、お金も掛かり、1年が過ぎました。先祖様のお陰で職人に恵まれ有難かったです。自分の意思をしっかり持って、親切を忘れないで生活していきたいと思っています。

佐藤進一

ほんの一言。地震で屋根のかわらが壊れました。トタン屋根に替えました。風呂も壊れました。部屋、壁すべて壊れてしまいました。恐ろしかったです。

小林義夫

生活を一変させた10月23日の中越地震は本当にものすごい大地震で、家が潰れると感じました。夕方6時前で、夕食の支度でガ

スを使っていましたが、ガスを止めようにもあまりの揺れでガスを止めることはできませんでした。阪神淡路地震の火災のようにならなくて助かりました。家の中は壁が落ち、足の踏み場も無く、特に2回はひどく、サイドボード、テレビ、蛍光灯が落ちました。子供が地震10分前まで2階のテレビを見ていたのですが、怪我をしないで本当に良かったです。

地震後、家の中は危ないので隣の方の空き地に避難し、車中で一泊し、次の日は家の中を片付けましたがライフライン（電気、水道、ガス等）は本当に有難かったです。半壊で屋根、壁、床、風呂等を替えましたが、地元の業者さんは忙しいため、豊栄市や柏崎市の業者さんから来ていただきました。全国からの義援金や支援、復興に感謝し、これから自分達で何とかお返しできることがあれば実施していきたいです。



内山毅

天災はいつ起こるか分からない。大雨、台風などはテレビで情報を知ることが出来る。火事は各自が気をつけて火の用心に心がけることによって防げるのでは。雷は発生したら屋外に出ないで音が長く身近で鳴り続くようなときには電気製品のスイッチを切っておく。大雨で川の水が増水したり、家の付近まで大水が来たときには高台に逃げるのが安全だと思う。2年前の地震は土曜日の夕方だったので、これから夕食を食べようかという時間だったが、家族全員は揃わなかった。風呂にも入らない人が多かった。ガスの元栓は地震発生直後に止めた。

- ・ 地震の発生した時間が夜中でなくて本当に良かった。
- ・ 我が家の体験で恐縮ですが、食器棚を裏

側の壁に固定しておいたおかげで、前に倒れなく済み助かりました。

- ・ 今後に備えて地震のときには、外へ逃げられるような状態にしておきたい。
 - ・ 電池を常に身近に置くように心がけたい（貴重品その他も）
 - ・ 安全な建物のあるところに非難したいと思う（2年前のときは役場の駐車場に非難し、4晩を車の中で過ごした）
 - ・ 枕元にたんすがあったり、またその上に危険を伴うような物はおかないようにしたほうがいいのではと思う。
 - ・ 地震発生の時期が冬の寒い、雪のあるときでなかったのが本当に救われたと思う。
 - ・ 隣近所との絆の強さがとても心の支えとなりました。
 - ・ 2年前の地震のときは同時に電気、電話、ガス、水道が全部使用不可能となり、改めて日頃なんとなく利用している（当たり前のように）この4つのことに感謝の念を持ちました。
 - ・ 中越地震に対して多くの方々から心温まるたくさんのご支援を戴いたことに厚くあつく感謝します。
- 心からお礼申し上げます。そしてまたどこかで天災が起きたときには少しでも恩返しが出来たらと思います。

深井正夫

私たちの住みよい越路町の穏やかな時間はその時止まりました。平成16年10月23日午後5時56分、私たちのかけがえのない宝物が一瞬にして崩れ去った時、その大きな揺れはあまりにも突然でした。各地に甚大な被害が発生しライフラインは寸断、山、山、田んぼ、見る目にも何時もの景色は姿を消していました。車中に泊まることも出来ないなかで高齢者、病気がちの人たちをどのように今後考えていったらよいか、頭の中を整理することが出来ませんでした。

この震災を私たちはずっと忘れてはなりません。度重なる余震におびえていた夜を私は忘れません。この震災が私たちに教えてくれたことがあります。それは「人と人が団結する力」「人の心の温かさ」です。

全国各地から多くの支援、励ましの言葉を戴きました。その一つ一つが私たちに勇気付け、

復興に向けての活力源となりました。

それまで誰も経験したことのない大地震、その後の余震は立ってはいられないで、腰をかがめながら、闇におびえていた夜。一睡も出来ずに病人の看護をしたり、高齢者の見回りをして夜明けを迎えた情景を思い出します。忘れることが出来ないのはお互いの連携により炊き出しの準備に取り掛かったことです。19時30分頃から番場公民分館長の支持により、米の準備、薪のとりそろい、野菜を暗い山の畑に採りに行く人。水をポリバケツに汲んでくる人。火を起こしお汁、ご飯を炊き、おにぎりにしてくれる人。人と人が団結しなければならぬということをも感じました。

まずは高齢者の人たちに食べてもらい、元気を出してもらうように力を合わせたことが昨日のように浮かんできます。多くの町内の皆様とともに地震に負けてはならない、必ず復興するんだ、という強い信念を持つことが出来ました。天災は忘れた頃にやってきます。いろんなことを経験することが出来ました。どんな時でも生かすことが出来るように今後の人生を歩んで生きたいと思っています。町内の皆さん、今後とも頑張りましょう。

永井孝子

- 1、地震発生時、夫や息子は外出中。私一人家の中、恐ろしかったです。
- 2、ものすごい揺れで家が壊れると思いました。半壊です。食器棚が前開きのため、茶碗など落ち半分くらい捨てました。ど

の部屋も品物は倒れ、散らかり放題です。

- 3、家が少し前に傾いたので、戸、窓など隙間が出来、たて付け困難になりました。壁も相当落ちました。
- 4、余震が時々来るので壁が落ち、補強壁をしてもらうまで掃除が大変でした。
- 5、支援物資の配布などでは、ちょうど組親でした。配布など永く続くようでしたら、組の人にも協力してもらったほうがいいと思います。中町内の役員の方々は自分の家のことは出来ず大変ご苦労されたと思います。
- 6、教訓その1、タンス、サイドボードなど高いところには重いものは置かないようにします。
- 7、教訓その2、天災はいつ来るか分からないので、大事なものは家族で話し合っておく。町内の連絡などあるから集合場所も把握しておく。水の確保は大事です。

佐藤三良

以前から巨大な南海地震発生の危険性が報道され、巷間囁かれてはいたが、正直なところ「よそごと」程度の認識しかなかったのが本当であり、今回の地震は、まさに「青天のへきれき」であった。

地震発生から短時間に震度5以上の余震が連発した。茫闇のなかにはっきりと我が家の揺れを目にし、愕然として極度なおびえを経験した。ほとんどの人が資料館広場に集まり、お互いに無事を確かめ合ったことと思う。皆さんと一緒に安堵感もあり、我が家の被災の惨状を見ても不思議と精神的に平静を保つことが出来た。車中に毛布類を持ち込んでの窮屈な夜が続いた。又、余震が収まり始めても、余震に備えて玄関近くの部屋での雑魚寝が続き、体力的にも疲労が重なった。夜は通電後も常に懐中電灯は手元に置いた。トイレでは狭い空間に圧迫感を覚えたり、常に地面の揺れを幻覚した。「トラ、ウマ」状態

が相当期間続いた。ライフラインのすべてが機能停止したため、食事はもちろん、風呂もお手上げ。

本震後、いち早く町内有志による資料館広場での炊き出しはありがたかった。以後、連日支援物資に頼ることとなったが本当に感謝している。風呂でさっぱりしたのは一週間程度たってから、町内のお風呂屋であった。ようやく発生から3日目に入り、仮設住宅の灯もほとんど消え、まもなく撤去されとか。未曾有の天災の渦中であって、お互いの支えあい、助け合いの精神が逆境を乗り越える勇氣と力につながっていると思う。

すでにほとんどの方が住宅再建は終わられたようであるが、まだまだ復興復旧を要する方も多いと思う。我が家も例外ではない。これを期に、防災意識など災害ともっと真剣に向き合わなければと思う。



永井 力

「風呂に入らんけ」との声によいしょと腰をあげた途端「ドーン」と下から突き上げるような衝撃に続き、大きな揺れ。「地震だ!」。一瞬恐怖で頭の中が真っ白。直ぐ気を取り直し、急いで外に逃げ出す。6時過ぎに2度目の大きな揺れに尻餅をつく。「資料館に避難してください」の指示で隣近所連れ立って資料館へと向かう。

避難場所の広場は暗闇の中、人、ひと、ひとで一杯。少しの空間を見つけ家族全員一塊で寄り添う。夜は寒い。家から毛布をもってきて、これに包まれて暖を取る。夜半、年寄りには車中で眠ることになったが窮屈でとても眠れない。ままよ!と孫たちの制止も聞かず家に帰って寝る。

家の中は物が散在。壁も落ち足の踏み場もない有様だ。危険のため履物のまま家に入り、寝る場所のみ片付け床につく。翌朝、家族全員で少しづつ片付ける。壁は2度目の揺れで

崩れ落ちたようだ。台所用家財道具は建物に固定してあったため倒れず、中の食器類のみが大分壊れた。居間のサイドボードは重いため倒れず、また上に乗っていた人形硝子ケースが2つとも落下せず、人形も無傷であった。裏の畑は液化現象で黄色に変わり、このため土台も少し沈み、建具も何ヶ所も開閉できなかった。2階は時々来る余震におびえ、上がることが出来ず、2~3日経ってからやっと整理を始める。

翌日からの炊事はとなりと共同でやる。ライフライン全滅で初めての原始的な生活、今まで何も感ぜず暮らしてきた文明文化の世の中も、天災には如何に弱いものかと痛感する。電気、水は25日夜に復旧したが、ガスは翌月の2日にやっと使用できるようになった。電話も26日うまく通じるようになり、遠くの親戚や友人から安全確認とお見舞いの電話を戴く。風呂は三条まで行ったが、途中道路がところどころ欠損しており、迂回しながらやっと行くことができた。翌日からの宿泊はテントや車庫。

この災害で学んだことは

- 1、普段からの備えが必要、なかなか出来ないことだが必要なものの備え付けが大切。
- 2、隣近所、友人との良好な人間関係。災害時、お互い助け合うことが出来る基盤づくりが大切。
- 3、全国から寄せられた救援物資や義援金に感謝し、いつかはこの恩を返していくため「災害カンパ」に「助け合い募金」に進んで協力するよう心がけたい。
- 4、最後に、今回の災害に町民の誘導、老人の手助け、物資の配分など自家を省みず対応された町内役員の方々のご苦勞に感謝します。

佐藤佳子

地震直後、郷土資料館グラウンドへ車を移動させ車中で避難していました。何がどうなったのかわけが分からず。そして、

これからどうなるのかと不安な時間を送りました。が、地震当日の夜、そして翌日のお昼におにぎり、お味噌汁の支給は心が温まりました。

当日の夜、おにぎりを握りながら近所との方たちとの会話によって、不安や心細さも解消できた気がします。おにぎり、お味噌汁ご馳走様でした。



小野塚ひろ子

平成16年10月23日(土)午後5時56分、忘れもしない、この日のことは鮮明に覚えている。土曜日で隣組の日帰り湯治に西谷の中盛館へ行き、午後5時30分に中盛館を出発し自宅に戻ったばかり。台所にいた私と愛犬のラッキー。ドスンという音がして「あ、何時もの地震だ」と思うのもつかの間、間髪いれずに激しい揺れが続き、同時に電気が消え真っ暗の中。ラッキーが一目散に玄関のほうへ走ってゆき、私はと言うと夢中でシステムキッチンの食器棚にしっかりとつかまっていた。ガラガラガッシャン、食器棚から器が落ち、割れる音がしていた。

この日、我が家は私とラッキーだけでなんと心細かったことか。真っ暗な中、ラッキーを呼んでも反応が無く、部屋の状態も分からず(翌朝びっくり)、懐中電灯のあるところまで行き、明かりをつけて、まずラッキーを呼んだ。灯りを頼りに直ぐに私のところへ来て抱かれたが怖さで震えていた。この後しばらくの間、私から離れることを怖がり、いつも一緒にしようとしていた。

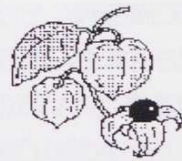
こんなとき、息子は職場の旅行で湯沢に出掛けていた。携帯電話でまず息子のところに一報を入れる。この最中、次の余震が着て、あまりの怖さに電話口で「キャーキャー」言ったことだけは覚えている。状況が分からない息子は、家が壊れてしまったと覚悟したそう

だ。家の中には危険だと思い次に私はラッキーを抱いたまま素足で外に飛び出したが、また、襲ってきた次の余震で立ってられなくなりその場所に座り込んでしまった。近くにある資料館グラウンドが確か災害時避難場所になっていることを思い出し、素足のままそこに向かった。すでに近所の小林さん一家がおられた。何回も余震が続く中、時間が過ぎるとともに、徐々に避難する方が多くなり、一人ぼっちだった私も少し安心した。資料館の空き地にブルーシートが敷かれ、中町内の方がほとんど集まり、隣近所の安否を確認しあった。このときが過ぎるのを待つしかなかった。夜も深まりだんだん寒くなってきて、今晚はどこで夜を明かそうと思案に暮れていたら、近所の小林さんの行為でラッキーと一緒に車中泊をさせていただき、小林さんの思いやりが本当に有難くうれしかった。結局その後、4日間お世話になった。近所の有難さをつくづく感じた。ライフラインがすべてストップし、便利な生活に慣れてしまっていたので途方にくれた。でも思ったより早く水と電気が復活し、とても安心できた。家の災害状況は半壊ということであった。屋根の瓦が落ち、部屋の壁土がところどころ落ち、クロスには亀裂が入り、部屋は物が氾濫し、改めて地震の怖さを知った。県外の親戚からは物資が届き、見舞金まで戴いた。また、損害の程度により義援金も支給され、全国の方々からの暖かい気持ちも本当に有難いと思った。いつかご恩返しをしたいと思っている。いつ来るか分からない地震の恐怖は、経験したものにしか分からない。これ本当です。

永井正一

- 1、茶の間でテレビを観ていたら、突然突き上げるような振動に見舞われる。2度目の振動で電気が消え、物が落ちるすごさに外に飛び出る。
- 2、今までにない、続けてくる大振動に、思わず庭のつげの木につかまっていた。

- 3、時間が進むにつれていつの間にか番場さんの畑に近所の人たちが集まっていた。
- 4、夜の寒さに家の南側に積んで置いた薪を夜通し燃やし暖を取った。
- 5、一時は自分の家も潰れると思ったほどだが、結果的には家の中の壁に、どの部屋も数多くのひびが入ったが落ちなかった。
- 6、先祖のお蔭で地盤がしっかりしていたことに感謝する。
- 7、2～3日すると県外の親戚より電話が着たが連続で来る地震に家の中に思うように入れず、見逃してしまうことがあった。
- 8、改めて大地震の動きの大きさに思い知らされる。



深井幸一

あの日は職場の帰りであった。車の窓から見た夕日が、雲が今までに見たことのない色で染まっていたのを覚えている。自宅に着き、車から片足を出した時だ。ドドドドー！車と一緒に跳ね上げられた。必死にハンドルとドアをおさえた。ドアで右足を打ったがそれどころではない。何が？自宅とあたりの灯りが消えた。地震だ。われに返り即、入り口の懐中電灯をつかみ、親父のいる部屋へと靴を履いたまま走る。親父は酸素ボンベの管をしっかり握り、呆然としていた。早く、気ばかりがあせる。携帯用の酸素ボンベに切り替えている間に余震が来た。そのときは暗闇の中で、あっち、こっちのものが倒れたが見る余裕も無い。お袋いたかー？返事が無い。ガス栓を止めに行ったのか。お袋が倒れた食器棚の上から這うように出てきた。親父を肩に乗せて、お袋の手をとり、家の外にやっと出ることが出来たときは助かったと思い、シーンと目から涙が溢れた。車庫前の広場に3人で寄り添っている時にまた次の余震が来た。電柱と家がぎしぎしと今にも崩れそう

音を立てて揺れている。周囲のコンクリートの割れ目から泥水が噴出した。ここもいられない。危険だ。

付近はシーンと静まり返っている。みんな安全な場所に避難しているようだ。毛布を抱えて親父、お袋を軽トラに乗せて資料館へと向かった。途中、道路に屋根瓦が落ちたり、塀が崩れていた。広場に着くとみんながビニールシートの中、車の中にと寄り添うように地震の怖さを労わりあっていた。親父とお袋を小林貫一さんの車に乗せていただきありがたかった。妻や子供たちと連絡が取れないのが気懸かりだが、何よりも親父の酸素ボンベの残量が朝までもたないのが心配だ。家から大ボンベを運ぶのを仲間に頼むと、ヨーシと近くにいた仲間達が軽トラに乗り込んでくれた。感謝、感謝だ。月夜の寒い晩だった。炊き出しをするぞ！号令がかかる。自分も屋台の車庫から発電機を出し、灯りをつけた。鍋や釜、米などを番場尚さん宅から運び、畑から白菜やねぎを取りに行く。安浄寺さんに水を汲みにと、各々の家から冷蔵庫の品を持ち寄ったりなど、町内の方々みんなが共同で作った暖かいおにぎりや、味噌汁が恐ろしさや寒さを和らいで、安堵を与えてくれたものだった。何回も余震が続く中、やっと妻や子供達と連絡が取れた時はほっとした。その後帝国石油さんが大型発電機を提供してくれ有難く思った。仲間とラジオを聴きながらお酒を飲み、眠れないまま朝を迎えた。自宅が心配で見に行く。恐る恐るそと家の中に入る。家具類全部倒れて晩酌のワンカップが1ヶ足元に転がっていた。土壁が落ち、足の踏み場がない状況だ。蛍光灯の天井板は蜂の巣のごとく穴だらけ、窓のサッシ戸が割れないでほとんど外に飛んでいる。タンスも出ていたのにはぶったまげた。押入れの柱が折れ、玄関の柱が折れたのが地震のすごさを語っていた。

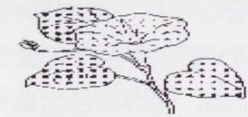
町内を回ってみた。車で田んぼに避難している人達や、畑で数人が暖を取っていた。何

よりも道路や家並みが被害で一変していたのが凄かった。(数日後、瓦屋根の家々がブルーシートの青一色になる)。翌日から町の緊急救援物資のカンパンが1軒に2枚くらい届く。次にアンパンが3ヶと、やっと善意による物資が届くようになった。みんなで協力して配給を手伝うが、その有志や、自分も順次職場へと復帰していく。人数が減り、最後まで配給した町内会長、役員、班長さん、有志に感謝したい。

余震が収まり始めても部屋を片付ける気にもなれず2ヶ月近くの間、ひとりで車庫でのゴロ寝の生活が続く。妻はローカで。いつまでも揺れを幻覚した日が続いた。町内のあっちこっちで応急住宅再建が始まるが、自分は山古志地区や小千谷方面の復旧の仕事で飛びまわり、暇もなく疲れを取るのが精一杯。頼む業者の当てもなく、役所へも行くことができないで途方に呉れていた時に、正夫さんから六日町の左官業者を紹介していただき助かった。このたびの地震は多くの教訓を我々に教えてくれた。町内の団結、協力、助け合う心、有難さなど、町内の方々、全国の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。毎晩のように酒を持ち寄り、夜警に理由をかこつけては仲間と晩酌をやったことなど生涯忘れることのない体験をしたことを書きとめておく。

そして忘れてはならない人、元町公民館館長・番場尚さんだ。その人においては町内を語れないだろうと思う。尚さんを偲ぶときいつも大きな声で楽しく話をしてくれた。間違ったことや、話が合わないときは大声で怒鳴る。「バカー」だ。聞きなれた我々には親しみがある。やることが純、半端でないのだ。仲間もいつの間にか何かの魅力に惹かれて後についていく。祭りではシャギリの伝授と山車創りだ。毎年金賞を取っている町の雪像祭りの協同作業、餅つき、そば打ち等など。そば打ちのとき山芋を隠れて海苔巻きにして食べたことを思い出す。やることなすこと

が真剣なのだ。いざというときに頼りになるお山の大將だ。このたびの地震のときも行動力と実行力でいち早く炊きだしの号令をかけてくれた。私にとって最後に聞いた尚さんのこえになった。ありがとうございました。合掌。



金子義人

それは何の前触れもなく突然やってきた。銀行休日のみの仕事で、朝8時から長岡イトーヨーカドービルの2階でATM監視の勤務についていた。あと1時間チョットで終わりかと思っていた矢先だった。激しい揺れと古いビルの不気味な音(コンクリートが舞い落ちた)、しかし電気は切れなかったのであまり恐怖感は湧かなかった。同僚と急いで1階へ降りたが防火扉が閉まっており、一瞬どうなるものかと思ったが、強く引いたところ開いたので外へ飛び出した。トランスの乗っている電柱は揺れ、電線は波打ち、道路は人で

いっばいだったが、その人たちの顔を見て落ち着きを取り戻した。

その後、ビルに戻った直後の余震で外へ出て7時過ぎまで近くの駐車場で過ごし、7時15分頃ビルに入りパソコン、室内灯の電源を落とし、ビルを出た。バス、電車は不通。家のことが気懸かりだったが連絡がつかず、(銀行警備室の固定電話からは全くつながらない)8時半頃、人づてに公衆電話は直ぐにつながるとの話を聞き、イトーヨーカドーで家内の携帯に連絡、一発で連絡がつき、車での迎えを要請した。やっと帰路につくことが出来た。その後の生活も含め、二度と体験したくない出来事でした。

小林清子

そのとき私はもみじ園山荘の中にいました。鈴木さんがこれから始めますと……の音が聞えました。これから楽しい宴が始まると楽しみでした。ものすごい地鳴りがしました。これからの不安を物語るような、不気味な気がしました。……直ぐに電池を持って身構えました。そしてそのとき揺れました。物凄い。山荘の壁が、障子が悲鳴をあげました。お客様から外に出てもらう。越路中学校の駐車場へ。ところが中学校はもっと悲惨でした。町の中の電気は切れて、闇の中に放り出されたような気がしました。度々の大きな揺れの中、若者たちは琴やお茶の道具や笛などを片付けてくれました。夕方?7:30頃、お客様と私は山を降りました。そして、主人と子どもが迎えに来てくれましたので少し安心しましたが、町の中は今までの町ではなかったです。ちなみに主人は散歩中でした。子供は運転中。2人とも今の世の地獄を見たようでした。ね。ところで我が家は無事でしたが、カラクリ時計は上から落ちて、あんなに愛されたのに修理できません。人形ケースも粉々でした。上のほうは充分気をつけて固定するべきでした。



永井秀夫

当日は休日で自宅にいました。夕食前で妻がその日録画してくれていた「何でも鑑定団」を見ていました。突然ドドッと言う音とともに上下にぐるぐるとゆれました。はじめ地震というよりも何事か?と一瞬思いました。その後直ぐに地震だと分かり妻とともに、寝たきりである母の部屋に行き、背中におぶって家から大慌てで逃げました。あまりにも大きな揺れのため家の中でテーブルの下などで危険を避けるほうがよいか、外に出たほうがよいか、などと考える余裕もなく、ただ早く外に逃げ出さなくてはと決めての行動だったのでしょう。外に泊めてあった妻の車に、母をようやくの思いで入れると同時に、又大きな揺れが来ました。車もそばの塀もがさがと音を出しながら大きく揺れ、家を見たら左右に揺れています。生きた心地のしないほどの恐怖におそわれました。この地震を経験し、生まれて始めて自然災害の怖さを本当の意味で、身をもって味わったといえるのではないのでしょうか。60年間生きてきて、今回の中越地震以上の大きな自然災害は、国内でも過去に数々のいろいろな災害が各地域で発生しましたが、そのたびごとに連日、テレビや新聞で報道されました。甚大な被害状況や被災者の惨状を目のあたりにして、大変なことになっているな、気の毒な人たちだと同情し、心が痛みました。が「この地域のことでなくてよかった」となり、自然災害に対する恐ろしさを感じて、一時的にその災害に対する備えや発生後の対応、処置のことをも考えますが、本当に真剣に考えたりしてこなかったといえます。日常の仕事や生活に追われ、「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」という諺、そのままの自分であったことを強く自覚しました。そして又、地震

後2年が経過した現在もまた、このわが身を持って経験した中越地震のあの恐ろしさと、被害を受けて不自由な生活を余儀なくした後の、あの苦しい反省や備えに対する決意もまた早々と失いかけています。

今、この体験記録を苦笑とともに書いています。以上のように、いい加減な自分に情けなくなりました。しかし、又そこに気がついたことで反省をしました。こんな私ですから今後は時々家族や友人との日常において、時折この中越地震の体験を話題にし、自然災害に対する備えや、「忘れた頃にやってくる」を語る自分にしたいと思います。



永井紳一

1、発生時の状況

雪は多少多いものの、これといった災害にあうこともほとんど無かった地域を、夢にも思わなかった大地震が襲った。夕食が終わった頃、ドーンという音とともに地中から突き上げられるような振動と激しい揺れに襲われた。一瞬何が起こったのかわからなかった。手で頭を覆い、近くのソファに身をかがめて納まるのを待った。しばらくして、前の道路に出ると塀が崩れ落ちているのが目に留まった。激しい揺れの続き、立っていることが出来ず地面に這い蹲り、大きく揺れる電線と電柱に恐怖で声も出なかった。ようやく資料館前の広場に避難し、車の中でその後7泊することとなった。よく晴れた寒さ厳しい夜であった。

2、復旧に向けて

- 仮設住宅の建設(資料館広場・3棟20戸)
- 波打ち、亀裂の走る道路の補修
- ライフラインの復旧(電気10月26日、ガス・11月3日、水道10月26日)
- 新築家屋 16戸(町内)
- 撤去家屋 2戸(町内)

3、生かされた教訓

- 夕食時でありながら、火災の発生があったこと。
 - 亡くなった方が無かったこと。
 - 家具、食器棚などの固定。
 - 頭、足元の安全確認。
 - 非常時の持ち出し品の準備
 - 超過電流を防ぐブレーカーの安全操作
- #### 4、かけがえのない体験
- 家屋を始め多くのものを失い、いためることになったが、自分自身、家族、町内の皆さんが無事に避難できたことは何よりも有難いことであった。又、以下のようなかけがえのない体験をすることが出来たことを感謝したい。
- 県内外の多くの人々の支援と暖かい励ましへの感謝。
 - 町内役員やボランティアの献身的な活動、リーダーシップへの感謝。
 - 町内、隣近所の結束の大切さと有難さの再認識。
 - 災害弱者と呼ばれる人々への避難時の助け合い体制や安否確認方法についての意識が甘かったことへの反省の機会。
 - 家屋の耐震構造、防災対策への関心や取り組み。
- #### 5、被災から3度目の冬を迎えて
- 2006年12月16日、2年間の仮設住宅の入居期限を迎えた。過去2年の豪雪に続く3度目の冬を迎え、長岡市では入居当初の4分の1に当たる740世帯が、越路地区では、西谷地区7世帯72名の方が期限延長を認められた。住宅、宅地、農地問題、心労で体調を崩された方、震災のトラウマに悩む子供たち等などの問題解決に向け、復旧、復興は今も続いている。
- (付)忘れられない大震災
- 新潟地震(1964,6,16、午後1時2分発生、粟島沖を震源とするマグニチュード7.5・震度7、新潟市震度6)当時25歳、現上越市頸城区の職場で昼食中。テーブルの下

にもぐり、それから階下に下り外に飛び出る。

●阪神・淡路大地震（1995,1,17 午前 4 時 46 分、マグニチュード 7.3、震度 7）
倒壊した家々（全半壊 249,180 棟）、燃え続ける街（全焼 6,965 棟）、脱線した電車、崩壊した阪神高速道路などパニック映画を見ているような衝撃的な TV 報道、死者 6,436 名を出した大震災だった。



永井敦

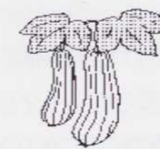
中越地震を体験して感じたことは、自然災害の恐ろしさです。今まで、大切に守ってきたものを、わずかな時間に失わせる力に、人間の力では、かなわないと痛感させられました。と同時に、人と人との関わりあいの重要性を、感動して涙が出るくらいに感じました。日本全国、遠くは海外からのボランティア、支援物資、励ましの言葉など大きな地震を体験して、つらいことばかりでしたが、風化させないで次世代まで語っていこうと思います。

内会の人達に大変助けられた。日頃、普通に暮らしていると人の温かみが伝わらないものだが、この時ばかりは毎日いろんなことで感謝していた気がします。この地震を教訓に、今も感謝する気持ちを忘れないようにしている。何はともあれ、中町内から一人も怪我人が出なくて良かった。

永井清

あの時私は

早いものです。2年が過ぎるのも早いものです。私だけかもしれませんが、通常の生活が狂わされ、いろんなことをしなければならなくなり、まだまだ尾を引いています。中越地震がそれだけすごかったことを身にしています。あの時は2階で子供がテレビゲームをしているのを見ていたら、ゴーという音がしたかと思ったら、急に家が揺れ始め、ただテレビを押さえているのがやっとでした。何より、家族が無事であったのが何よりでした。最後になりますが町内の皆様には感謝しています。資料館では炊き出しなどいろいろな行動して下さいました方には心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



永井伸司

テレビの中の出来事だと思っていた。まさか、自分の家が地震に見舞われるとは夢にも思わなかった。地震発生時、家族は、バラバラのところにいる。私は子供を3人乗せて運転中だった。タイヤがパンクしたのか？ハンドルを取られて車を停車させた。周りを見回すと他の車も停車していて、信号は点灯していない状態だった。おかしいと思いきぐ家に引き返すと、妻が祖母をおんぶして外に立っていた。そして車を降りた瞬間、ドーンと2回目の余震が来た。変電所の電線が軋む音を今でも覚えている。ここで始めて地震が起きたことを私は知った。どうしていいかわからず、田んぼに避難していると、小千谷の中心地にいた母がほこりまみれの車で帰ってきた。家族全員揃ってほっとしたのをよく覚えている。

結局家に入るのが怖くて、その日から3日間、車内で寝泊りし、余震が起きても直ぐ逃げられるように、そのあと3日間は車庫で過ごした。初めて風呂に入ったのが地震からちょうど1週間後だった。この地震で近所の人や町

小林太一

自分の人生で一番怖いと思ったことが生じるとは？あの時、最初の揺れで家の外に出た。そのときはまだ何ともなかったが、2度、3度とさらに強い大きな余震が続き、だんだん恐怖心が大きくなった。揺れが治まったかなと思い、家の中に入ろうとした。しかし、家の中は想像した以上に見られる有様ではなかった。外へ出るときはまだ立っていた石油タンクが、横に倒れているではないか。前日、400リッター満タンにしたばかりで、しかもその秋入れたばかりの新車をこすって倒れたようだ。タンクの上の空気穴と灯油を入れるキャップがよく閉まっていなかったので、灯油がどんどん出ている。下一面、石油がたまっており、家族みんなでタンクを起こし、火の有無を確かめ、素手で灯油を汲んでみたが、思うように行かず、一部流れ出てしまい、朝までとても心配だったこと。何事

もなく本当にホッとしたことは今でもはっきり覚えている。

今思うとぞっとする思いが地震とともに忘れられないことでした。家も倒れず、その冬、生活できたが、寒い冬であったことも忘れられない。怪我も無く体調も何とか維持できたことがせめてもの救いであった。



大塚清史

帰宅途中の信号待ちをしているときでした。いきなりどちらかと言うと上下に衝撃が走りました。追突されたのか？でもおかしいと思うと、目の前の信号が消え、上下に激しく揺れている。地震だ！！そのとき分かりました。とにかく家に帰らなければ！！朝日の橋は通行できず、白山を通過することにしました。白山地内で再び大きな揺れがあり、家族が気になります。一刻も早く帰りたいと誰もが思ったことでしょう。そんな中、道路情報を交換したり、交差点でもなんとなく道を譲り合い、信号機が機能していなくても思ったよりもスムーズに帰宅することが出来ました。子供2人と両親が無事であることを確認し、ホッとひと安心。家内とはなかなか連絡が取れず心配しましたが、しばらくして無事の確認が取れホッとしました。

中町内の方は大勢の方が資料館前に集まり、夜遅くまですごしました。秋も深まり寒い夜の中、子供たちは宮沢さんの子供たちと一緒に毛布に入れてもらい、自分は炊き出しの手伝いを行いました。みんなで助け合う姿があらこちらで見られ、ここに越してきて1年とチョット。良いところへ越してきたなと思ったものでした。翌日、家内の実家の人たちが新潟市から道なき道？を探しながら来てくれたときは本当に有難いと思いました。子

供たちは約10日間ほど新潟にお世話になりました。自分も新潟から戴いた水と食料をお世話になっている米山さん(お年寄りだけで住んでいる)に届けました。他にも近間はもとより、遠方の知人からも物心ともにいろいろと援助をいただき有難いことだと思ったものでした。

今となっては、人は自然の中ではなんと無力であるかと思い知らされた反面、人と人とのつながりの大切さ、人を思う気持ちが町や地域を再建させ、そして人を生かすのであると実感させられた出来事でありました。



番場吉夫

「この辺(中町内)は、雪は多いけれど天災がなく、良いところだね…」と家族で夕食時に話した4~5日後、10月23日は、いつもと変わらぬ我が家の夕食だった。突然、ぐらぐら揺れるのと同時に、食卓脇の食器棚から皿が足元に流れ落ちてきた。「地震だ！逃げろ！」廊下の柱にある懐中電灯を持って外に出ようとした。建物の下を避け、旧魚沼線の農道へ行こうとした時、30~40cmの横揺れを感じた。「もう家は壊れる。もうだめだ…」と思いながら飛び出し、農道へと70m程いったところに、近くのあばあちゃんがおられ、一緒に逃げた。この頃、ふとわれに返って、我が家のことが心配になり、引き返してみた。暗闇の中に黒々と我が家を見た。親戚の人たちはどうしておられるかと歩いていくと、いきなり20cmくらいの道路の陥没に足を取られた。直ぐ前には下水道のマンホールが40cmくらい持ち上げられているのが見えた。「これは大変だ！注意せねば」と思った。実家前の畑の真ん中あたりに数人が避難しておられ、ブルーシートを敷き、豆炭コタツ、ストーブで暖を取り始めた。この間、数回の余震で恐怖の連続、寒さが加わり焚き火も始めた。そうして、隣組の数家族が一つのコタツを頼りに寄り添っての一夜が始まった。8時頃だったか、各々が家に戻り、食べ物やラジオを持ち寄った。ようやく情報を聞くことが出来、災害時の通信網の必要性をつくづく感じた。中町内はいち早く役員、公民館、そして近所の婦人部の方々による「炊き出し」が行われたようで、ハンドマイクから「資料館でおにぎりを用意した」と聞こえてきた。東の空が少し明るくなってきた。数回と続く余震、畑に敷いたブルーシートの

下から冷えてくる寒さ、空腹を耐えつつ過ごした恐怖の一夜、それでも雨や風がなかったことが神助けだと思った。早速我が家に帰った。幸い、外見はそのままに見えたが、各部屋のタンスや棚が悉く倒れており、その無残な姿に天災の恐ろしさにただ、ただ呆然とした。日頃からの心がけか、一時避難した隣組世帯20数人、誰一人怪我も無く、各家の火の始末も良かったことなどが一番良かったと今も思っている。



宮川 清

●18日に女房の親父がなくなり、すうと帯織に泊まっていて24日の日曜日が初七日。地震当日は香典の勘定をしていた。5時半頃終了。一服しウィスキーにお湯を注いで飲もうとしたらいきなりものすごい音とともに揺れが来た。何回も何回も外に逃げた。家の中は生花が全部倒れ12畳二部屋は水浸し。義母は余震にも関わらず一生懸命に落ちた額のガラスや、生花の片付け。逃げろといっても聞かず。婆バーの一念を見る。時が経ち、一応片付けが終了してから自宅に電話するも不通。携帯も不通。何やってるんだ我がNTTは。夜中になって初めて息子と連絡が取れた。息子たちは嫁さんが日勤で、子供連れ迎えに行っており自宅は全く不在状態。助かった。しかし、家の中はメチャメチャとのこと。だいぶ我が家も古いから覚悟は決めた。明日の初七日を終わらせてから一杯機嫌で女房の運転で帰ることで肝を据えた。

●国道8号線・長岡東バイパスが交通止めとのことで、午後2時頃見附市の山際の道を選び帰路に着いた。椿沢、加津保町・浦瀬を通り何とか帰宅できた。途中、仲間のうちへ顔を出したりしてきたが道路を含め相当やられていた。だが仲間の無事な顔を見て安心。

4時頃自宅にたどり着いた。尚さんに開口一番「いままでどこへ行ってた！」と怒鳴られたが「実はこれこれ」と言ったら「そうか」で来迎寺に復帰。その尚さんも今はない。病いをおして頑張ってくれたんだ。合掌。

●資料館のグラウンドは炊き出しの準備やらでござった返していた。家の中を一目見て驚いた。まさに手のつけようがない。灯油タンクも倒れ中は空っぽ。起こしてもらいありがとう。みんなが協力し合っている。俺もなにか役に立てるかと思い、そのうち救援食料の朝、昼、晩の食事の調達、運搬、区分け、配布が大変とのこと。水曜日頃になったら若手の強力な部隊が職場復帰で超心細い。朝、スーパーデラックスの軽自動車から降りると足がふらふらする。朝飯の調達から始まる。家の中のことは女房と息子がいれば何とか。それやこれやでそれでも少しは役に立ったか。夜になれば一日の締めくくり。何処で晩酌をやればいいのか。順二郎さんと幸一さんと相談。今日は順二郎さんの車庫。明日は何処。青山町内会長に怒られないように。各々が酒、ウィスキーなど持ち込みシャッターを下ろしながら。盛花堂の賢行さんも「俺は飲まんけど…」と差し入れがあったりして。これでまた明日も頑張られる。のん兵衛なんていつでもどんな時でも、こんな大変な時でもおんなじ様なこと考えているんだなあ〜と合点。

●義援金も、ブルーシートも、食料も、自衛隊の風呂も、道路・ガス・水道・電気の仕事も多少の遅れはあったものの全国からの救援隊で助かった。ありがたかった。ただ自衛隊の緊急食料のあのパック、あれだけはチョット。我儘か。

●一年後「そろそろ我が家も見えてくれ」と吉田住建に連絡したら「どうかなっているのか？」には参った。晴れて我が家も1年後の一昨年の秋、約1ヶ月ちょっとの復旧工事。でも退職するとき、「これからは年金生活、酒ばかり飲んでいたし、たいした蓄えもない、自然災害の保険もチョットは入っていない

いと」となんとなく契約。助かった。でも、相当足が出た。しかし、雨、露凌げればまあいいか。

●去年のクリスマスの日に雪降ろし。まわりの家は圧倒的に無雪屋根。うらめしい。

●協力し合う、助け合うことの大切さを感じた。我が家も含め、町内で人身事故がなかったことが良かったと思う。それにもまして青山町内会長・永井順二郎さんをはじめ一致団結してことにあたったことはすばらしかったと思う。ありがとうございました。

の後、消防団の人から資料館に行くように言われたので、近所の人たちと資料館に避難した。夜は実家の父が先頭になり、近所の人たちと協力しながら「炊き出し」を行ったので、その日の夕食は食べることが出来た。元町上、下の人たちも資料館に集まってきた。その後、私は消防活動のため役場前で交通整理を行いながら朝まで任務を遂行した。そのとき、自衛隊が小千谷方面に向かうところを見て、災害に対するすばやい対応に感動した。

永井市郎

これから夕食を食べようとしていたその時であった。身体が大きく揺れて何も出来なかった。自分はストーブの火を消そうとするが、身体がふるえと余震でうまく消せなかった。ばあちゃんも台所のストーブを消そうとするも、あわてていてうまく消せなかったことが思い出される。ようやく消して外に出ようとしたが、玄関でまた大きな余震で転がってしまい、出ることが出来なかった。恐怖感でいっぱいのところへ宮沢さんから「大丈夫か」などの声を掛けられたときはほっとして嬉しかったことも忘れられない。続く余震で4

番場虎雄

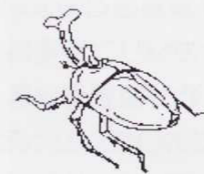
地震当日、自宅でテレビを見ていたら、ドカーンという音の後にしばらくして揺れと共に家財道具が壊れる音がした。揺れが収まるまで動けなかった。揺れが収まった後に家族4人全員の安否を確認した。その後、家の外に出て近所の人たちと話をしながら家の近くの広場にいた。2回目の地震が来た。そ

00リッター灯油タンクが大きく揺れていて倒れそうなので、大変と思い抑えていたことが、自分の身体を支えになっていた。何がなんだか分からない思いから、ようやく落ち着きをとりもどし、資料館に避難させてもらって、炊き出しや、支援物資、特に食べ物を貰ったことと、人の親切が有難かった。建築業に携わっていたお陰で風呂、壁、台所など一部損壊で済んだ。なにはともあれ金がかかったが、二人とも大きな怪我もなく今日あることがなによりです。

青柳春霞

地震の日はたまたま両親が出かけていたのでその日は、おばあちゃんと私の二人しかいませんでした。夜は両親もいないので、2人でご飯を食べにレストランへ行きました。レストランの中に入ってすぐに地震が来て、早く家に帰らなきゃいけないのに、又地震が来るんじゃないかな、と思うと怖くて運転が出来ませんでした。少したってから家に帰りましたが、まず驚いたのは、鍵を掛けたはずの玄関が壊れて開いていたことです。家の中の様子を見たあとに近所に人たちがいないことに気づいて、みんな何処に逃げたんだろうと思っているうちに、「非難してください」という声が聞こえてきて、ようやく避難所に行きました。

避難先には大勢の方がいたのでやっと安心することが出来ました。次の日になって、両親も帰ってきて、ようやく家族全員が揃うことができました。この地震を体験したことは、自分の中でものすごく大きいことで、もう二度と体験したくはないけど、このことによって近所の人々の温かさ、家族の大切さを、改めて知ることが出来ました。最後に家族全員が無事でよかったです。



小林喜作

隣の旧小学校（越路資料館）に出来た仮設住宅を希望して、役場に行きましたが、満員でダメとのことでした。しかたなく長岡市内の一戸住宅に入らざるを得ませんでした。その後の対応がずいぶん違っていました。（仮設入居者の条件）しかし、当家の若い人たちの頑張りとは皆様からお世話をいただき新居



宮沢実

中越地震の発生から早くも2年がすぎて、日常生活のショッキングな多くのニュースの中に、当時の恐ろしさや、混乱が埋没されつつある。やがて、歴史の中に加えられて消えていくことになるであろうが、生きている限り忘れられない大地のゆれは、身体に染み付いている。私の父は関東大震災に遭遇し、隅田川に飛び込んで命拾いしたと生前話を聞いていた。この大地震が私たちの近くで起きるとは、思いもよらなかった。晩秋に向かう早い夕暮れ、突然大地が動いた。私は畳の上で横になり、新聞を見ていたが突き上げられ、一瞬何事かと思うまもなく、家中の悲鳴と家具の倒れる音で飛び上がり、動転して「逃げろ」と大声を出すのが精一杯であったように思う。ただ玄関に近かったので、戸を空けるのが大事と思い、飛びついて開けた。とって返して、子供2人が傍らにいたので、一緒に外へ飛び出た。台所で炊事をしていた

家内は、それでもガス栓を閉め、戸棚や食器、椅子などが散乱した中を越えて、玄関に出たという。家が高床住宅なので、3階にいた子供たちは、地面に立つまでの恐ろしさは大変のものであったと思う。その後、引き続いてきた余震で、玄関戸ははづれて動かなくなった。脱出した後で実にほっとした。高床であるので縁側や、窓から逃げ出すわけに行かないからだ。家の前の道に座り込んで、一家で家の軒が大きく揺れるのを見ていた。絶え間なく来る余震で軒先は大きく揺れ、電線は跳ね上がり、電柱が徐々に傾いてきた。それにしても台地が動くのは実に不気味なものである。車や工事など、人工の振動と違い、なんとも言えないものがある。その後、かなり小さい余震や振動にもおびえて、過敏になった。しばらくして、避難場所が伝えられ、郷土資料館のグラウンドへ行き、皆の姿を見て少し落ち着いた。夜は寒さが加わり、外で寝られず、車2台の中で一家7人が寝た。多くの人の行為で、炊き出しが始まり、水の補給も出来て感謝したが、やや大型の発電機が広場に持ち込まれ、暗闇が明るくなったとき、多くの人々が映し出され感激した。あの光景は今でもよく覚えている。地震発生から車の中で5泊し、家の脇の車庫の中でシャッターを開け6日寝て、家に上がったのは12日目であった。考えてみると車が収容し切れない避難宿泊から、多くの人を助けて混乱をいっくらか防いだと思う。食料などの供給は、救援が進みよかったが、ガソリンや電池の買い入れは大変であった。古い反射型のストーブも捨てずに持って大いに役立った。灯油もタンクにかなり残っていた。地震発生から伝えられた震源地付近や川口、小千谷、山古志の惨状や避難、そして各地の救出劇は息を呑むものばかりであった。が、3週間後、朝日から千谷沢方面まで被害建物の調査、相談会に参加して、越路町内の道路や建物の被害にも驚いた。地震の翌年から本格化した家の復旧工事を見ていると、地盤作りのために、今まで

にないボーリング調査から、セメント系の柱状改良工事や耐震壁、屋根の軽量化など、耐震強化策には目を見張るものがある。実に災害は忘れた頃に来るのでなく、明日にも来るという取り組みである。今年の春「大地の会」の野外巡検で、山本山の展望台から川口方面の震源地のほうの山並みを見たが、足元の小千谷市周辺が地震時をピークに70cmほど隆起したというがとても実感できなかった。



神林イチ子

食事の準備をしている途中であったが、地震のときトイレに入って出られませんでした。玄関の下駄箱が倒れたりして怖かったし、外に出られませんでした。家の中は電化製品や、食器棚が倒れてガラスなどがあちらこちに散らばっていましたが、どうすることも出来ず、ただただ怖かったです。あんなに恐ろしかったことは生まれてこの年まで初めての経験でした。次から次へと来る余震の大きなことが、なお一層恐ろしさを感じさせました。

隊の風呂にも入れてもらい、大変な中でも新しい体験をさせてもらいました。仮設の入居も許されましたが車椅子の病人では泊まることもならず、借家を余儀なくされました。2ヶ所を通い歩くこととなりましたが仮設があったお陰で、工事中の自宅地域のこと、諸々の事を知ることが出来、本当に有難く思いました。ただ一つ、仮設が決して和気あいあいではなかったことです。これもこの年になっての経験として、思い出の一つとして、心の中にしまっておきたいと思います。2年が過ぎ、やっと落ち着きました。

皆川スミ

私はそのとき、槇山の”けやき苑”の駐車場で、6時約束の娘を迎えに、自分の車の中でカーラジオを聞きながら待っておりました。いきなり車がひっくり返るかと思うほどゆっさゆっさと揺れるので、「誰がこんな婆さんの車にいたずらするんじゃない!」と思い当たりを見回したけれど、誰もいませんでした。すかさずラジオが地震を知らせてくれました。30分ほどの間にゴーという地鳴りとともに、大きな揺れがはっきりなしにきましたが、じっとハンドルにしがみついたまま、2時間あまり動きませんでした。8時過ぎ、やっと出てきた娘と自分のライトだけの暗闇の中を、夢中で帰ってきました。遅い帰りを待っていて下さった近所の人たちが、畑の中に敷いたブルーシートの中に迎え入れて下さいました。朝まで横にもならず一夜を過ごしました。二日目からは、自宅で玄関の戸一枚で飛び出せるところで寝ていましたが、2階が外れて下がっているのに気がつき、隣の部屋へ移りました。

地震から5日目に娘の嫁先のお姑さんが震災の犠牲となられ、自宅の片付けも出来ないまま1週間通うこととなりました。自衛

中沖直治

- 夕食時、大きな揺れで屋外にとび出しましたが、立っていることが出来なかった。家は上下、左右に揺れ、いつ倒れるかと思ひ、ひやひやした。その後、消防団の知らせを受け、資料館に行き、夕食の準備などボランティアの仕事に従事した。
- 1週間以上、食べ物などいろいろな物をいただき有難かった。
- お互いに協力し合ったボランティアの仕事が一番良かったし、心強かった。今後ともボランティアの仕事には、自分で出来ることは協力する覚悟です。

宮沢裕司

10月23日、午後の仕事で浦佐にいた。夕方、人に会う予定で長岡に向かっていて。妙見で信号待ちしていたとき、ドンと頭が車の天井にぶつかった。トラックがぶつかったのかと思ひ、後ろを見たが車はおらず、おかし

いな?と思ったが、信号が青になり発進。その後、第2波のとき、ハンドルがぶれ、タイヤが外れたかと思ひ、停車。路面を見たら、海面のように波打っていて、電柱は左右に揺れていた。その時、地震と知った。ほぼ同時にラジオでも放送していた。予定を変更し18:30頃帰宅すると玄関の戸は開かず、窓から入ると家の中はひどい状況であった。まだ家族は家の中におり、靴を履かせ屋外に避難させた。その後、資料館のグラウンドで避難生活。当日の夜、近所のおばちゃん連中が集まり、直ぐ炊き出しを始めたのを、頼もしくも思ひ、たくましさにも感心した。

翌日、家に入ると土壁は剥がれ、家具はグチャグチャであったが、テレビが同じ向きで上下が逆様で落ちていたのと、水槽が落ちていなかったのが不思議であった。4日目くらいに車中から自宅に泊まってみたが、余震で眠れず、結局車中で泊まることとした。1週間ほど車中で過ごした。子供たちは、地震直後は怖がっていたが、2~3日後になると、朝夕になると配給のパンがもらえ、昼間はまわりに人が大勢おり、学校には行かなくてよいし、キャンプ生活のようで大喜びであった。その年の夏の終わりごろ地震体験機で震度7まで体験してみたが、機械で体験する地震は、アトラクションの様でもあり、本当の地震とは全く別のものであった。今回の地震では様々な貴重な経験をしたし、(経験しようと思っても出来ないこと、全くライフラインがストップするなど)回りの人たちの親切、自衛隊の大切さも知ることが出来た。

長谷川守

未曾有の出来事でしたが、水害や台風の被害もなく、安心していたところ、近々大きな地震が起こると週刊誌などで耳や目にしていました。現実になるとは思いませんでした。私は職場にいて駐車場に避難しました。ガスの元栓を締め、全員の確認の点呼を取りました。夕食時でしたので来迎寺の方で火の

手が上がっていないか心配でした。道中、塀が崩れている家もあり、電気も消え、静まり返った異様さは今でも忘れません。資料館に避難していると聞き、町内の皆さんの顔や、家族の顔を見ましてホット安心しました。直ぐに資料館の中を片付けました。

夜も寒くなり、お年寄りの健康が心配でした。風邪は万病の元といひます。お年寄りには中に非難してもらいました。大きな余震もありました。資料館は正規の避難場所ではないという声も聞きましたが、今思うと寝泊りしてもらってよかったと思います。「臨機応変」という言葉があります。何事もその場の適切な指示と、対応が求められます。特に災害時は重要と思われれます。町内会長を始め、班長さん、そして町内の皆さんの協力と、まとまりがあったからこそ復興したものと思われれます。あれから2年が経ちました。復興の早さには驚きました。これも行政、そして全国からのご支援と義援金等のお陰と感謝しております。災害は忘れた頃にやってくるといひます。この経験を生かしたいものです。そして何よりも忘れられないのは、あの夜のご婦人方が握ってくれました炊き出しのおにぎりでした。私にとって忘れられない味となりました。ご馳走様でした。

永井邦男

地震なんてものはおおよそのところ、どこか他の地域のことで、我が故郷、わが町には、絶対ないものだと思っていた。しかし未曾有の大地震がわが町を襲った。その時私は、高校の同級会で湯沢にいた。ホテルの中は一瞬にして停電パニックである。家に連絡をとろうと思うが電話が繋がらない。携帯も繋がらない。家も家族もダメかと頭の中を不安がよぎる。一回だけ娘の携帯がつながり、家も家族も無事が分かり安堵する。

翌日お昼過ぎ、やっとの思いで家に着いたとき、町内の人たちが炊き出しを作り、一生懸命協力し合いながらやっている。大都会では考えられないことだ。私も一週間くらい度々来る余震におびえながら、家の中を片付け支援物資の配給を手伝った。電気とガスの来たときのうれしかったこと、有難さがしみじみ分かった。こんな経験は2度とないと思うし、あっては困る。この大地震で町内の絆がより強くなったし、家族の絆も深まったのではないかと思う。この出来事は代々語り継ぎ、記憶にとどめず記録に残そう。私の家は治していないからあちこちに地震の爪あとが残っている。書きたいことはいっぱいあっても、思うようにはかけないものである。後日、間に合えば「その2」を投稿したい。

のであります。世界のどこかで毎日のように地震や災害、そして事件が起きております。12年前にも阪神淡路大震災があり、多くの尊い命と資産が失われました。国内での発生であったにもかかわらず、他人事のように思っていた私でしたが、いざ身近の出来事となると、これほど大変で心身ともに大きなショックを受けるとは思いもしなかったのです。町内で、越路自治区で、山古志、北魚沼地区で家は壊れ、土手が崩れ、道路は波を打ち、電柱は傾き、その様はまさに「地獄」の一事です。さいわいに私の家屋も社屋も、そして親戚、社員も無事で、その被害は最小限に押さえられました。

「奇跡」としか表現できません。地震発生以後、食糧配給、仮設住宅の建設、インフラの復旧、災害援助、ボランティアの皆様の支援など、県や国、民間からの速やかで温情溢れるその対応振りには心より敬意を表します。本当にありがとうございました。改めて「日本の「底力」を感じた次第であります。このたびの地震で学んだことは、災害時に備える心構えと訓練の定期的な実施、建築工法のあり方、避難所の確保、それらに関する情報の早期提供などを現実化することだと思えます。

「災害は忘れた頃にやってくる」をまさに証明した出来事だったと思われま。これから近い将来、地震やそのほかの被害は必ずやって来ます。中越地震を教訓にしたいものです。

大谷義広

まずはこのたびの中越地震により、莫大な被害を受けられた皆様に心よりお見舞いを申し上げます。精神的、物質的にダメージを受けられた方々の一日も早い復興を願うも

の経験、どうしても自分のことだけ考えてしまいがちですが、中町内では直ぐに避難場所の資料館で、おにぎりや、味噌汁が振舞われ、地域の絆の強さを感じました。とても有難いことでした。もう、あのような恐ろしい体験は二度としたくありませんが、地域の方々と連携して乗り切った中越地震を決して忘れてはならないと思います。そのためにも今回のこのような形で体験記録集としてまとめることはとても素晴らしいことだと思いました。ご尽力いただいた方々ありがとうございました。

星野洋子

ドーン、グッラと来たその時は、これから夕飯を戴くときでした。ガスの火を左右に揺れながら、必死に止め、危険なので外に出ることに。開いた冷蔵庫の扉を閉め、台所のドアから外へ。変電所の裏の農道へ避難、近所の3家族5人と一緒に、不安に怯えておりました。持参したライト、携帯ラジオで情報を聞く。東山の方で赤く火の手が上がっている。ヘリが何機も上空を飛んできた。落ち着いたので、家から敷物、暖房着を持ち込む。長時間になると寒くなり、センターへ車で行く。大勢の人がいた。そのうちに、すみよさんのバスが到着、暖かい車内に入れていただく。冷蔵庫の中の物をかき集めてきた食べ物と、飲料水も頂戴する。車中で一晩明かす。感謝。トイレが混み、水が出なく、詰まり一番難儀した。翌朝から自宅へ戻る。飲料水を安浄寺様から戴き、トイレに使用する水は前の川から、その後、炊き出しがあり、毛布も配布され、心が温かくなりました。また、子供たちも翌日関東方面から車に食料と飲料水を乗せて駆けつけて、散乱した家の中を片付けてくれ、不安が少し解消された。

小林はなこ

中越地震では本当に多くのことを学びました。誰にとってもあれほどの揺れは初めて

引き続き子供さん・直樹君

ぼくはじしんのとき、おとうさんとテレビをみていました。いえのなかがすごくゆれて、すぐおとうさんのもとへかけより、テーブルのしたにもぐりました。お父さんは今でもかけよっていったときのぼくのかおがわすれられないそうです。ほんとうにこわかったです。こわすぎてなみだもでませんでした。でもおじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさん、ぼく、かぞくみんなけががなくてよかったです。



永井栄弘

1、地震時・自分の身体が浮いた。突然来た時は恐怖を感じた。立ち上がったが大きな余震で歩行できず、柱にしがみつかざるを得なかった。妻が心配で直ちに大声で呼び、台所から返事があったときのうれしさは今でも忘れない。妻はガスを止めた後、冷蔵庫が倒れない為と、自分を支える為に、手をそえていたことを聞き感心しながら二人で外へ逃げた。が、立っておられず道路端の電柱にしがみついてふと我が家を見たら、今にも倒れそうな揺れを見て覚悟したものだった。余震の間隔が長くなってきても家の中には恐ろしくて入れなかった。しばらくして小林太一さんの作業小屋に家族の方々がおられ、コタツもあり、そこで一時避難させてもらい、落ち着くことが出来た。しばらくして自動車が必要と考え、車庫へ行くとシャッターが破損しており、車が出せないで困っていたら、近所の方々3人からシャッターを取り除く作業を手伝ってもらって、漸く自動車が出せたことがうれしかった。そのとき何処からかガス漏れの匂いがし、タバコもすえず通報したことも思い出される。

ラジオで小千谷方面が被害大とわかり、当時

長男家族が小千谷に住んでいたため、じっとしておられず、夜7時頃小千谷へ出発した。途中、電柱が倒れていたり、橋げたが壊れ通行止めのところもあり遠回りし、やっと借家についたが誰もいなく、近所の方が車中におられ、保育園の避難所へ行ったことを聞き、暗い中やっと探し当て、全員無事の確認ができほっとしたことも一生忘れられない。ただ嫁さんが職場にまだいることで、その方面(吉谷地区)に行く途中、家が倒れていたり、傾いていたり、道路が盛り上がっていたりで、救急車も飛び回っている状況を見て、来迎寺はまだ良い方と分かった。地震の恐ろしさを改めて感じた。全員で落ち着いて車中泊を覚悟したが、自宅も心配になり、夜中12時半ころ、たまたま救急車が来るのがわかり、その後について帰ることとした。幸い帰宅出来たが、それから7日間、車中で生活することとなった。

2、住宅の被害状況

- ① 風呂の外壁、コンクリートが外側に倒れ、露天風呂のようになったこと。
- ② トイレの水道管がはづれ、1mの噴水が約1時間ほど続き、水浸しになって一部住居にも入ったり、外側の板も外れた。
- ③ 住宅の南西の一角が壁とともに外側に落ちた。原因は土台が腐っていてペチャンコになり家が傾いたのだ。
- ④ 玄関の引き戸が半分以上開かず出入りが大変だった。
- ⑤ 家財は冷蔵庫以外すべて倒れており、壁も90%落ち、足の踏み場もない状態になっていた。障子戸は地震特有の破れ方で、あとで調査隊が写真を撮っていた。(教材に出来ること)

3、後片付けと復興作業

- ① 家の中の片付け、清掃、外壁のシートカバー作業 2ヶ所など応急的なものは1ヶ月ほどかかり、傾いた家全体をジャッキで直したり、添え木柱を2本つけて

もらい、その冬がすごせる状態になってほっとしたことも忘れられない。

- ② 我が家は築後45年経過していることを考え、新築を決断、建築業者の選定、資金繰り等心配だったことも忘れられない。
- ③ そして、長男家族と同居が決まり、6人家族になったことが大きな変化になった。
- ④ 地震に強い住宅がある程度出来たことで、子、孫はこれから50~60年は大丈夫だと信じていることがせめてもの復興と考えている。

教訓その1、近所の助け合い精神が有難かったので今後も忘れないようにしたい。

教訓その2、支援物資、義援金が有難かったので、今後も自分なり余裕あるときは何とか協力していきたい。

教訓その3、自動車のガソリンは常に半分以上の状態を保つように心掛けていきたい。

教訓その4、非常時の必要物品は一括して玄関の近くに置く必要を改めて痛感した。

(現・元町中町内会長)

番場栄久代

10月23日午後、虫が知らせたのかお米を3俵すり、夕食の準備をしていると大きな揺れが来て、台所の食器棚は倒れ、すごい音がする中「大丈夫か?」と主人の声が聞こえました。急いで玄関から外へ出ようとする時と玄関の引き戸が外れてガラスが割れており、灯油のタンクが転んでいました。主人と一緒にタンクを起こしていると、前の家の瓦が落ちてきて、電信柱は家のほうへ傾き始めたときはとても怖かったです。

そして資料館では支援物資が来るまでの2,3日の食事は、家から5升釜と鍋と米と味噌を待ってきて、永井さんから薪を買いご飯を炊き、山の畑から野菜を取り、住吉さんから肉を買い、野菜炒めや肉汁などを皆さんで協力

してつくり、町内の方々に喜んでもらいとてもうれしかったです。地震前から主人は体調がよくなかったので暗闇の中、野菜を取りに行ったとき、包丁で手を切り、着ていた服を血だらけにして戻ってきたときはとても心配しました。

そしてこの中越地震は主人との最後の協同作業となりました。

(当時公民分館長・奥さん)

永井順二郎

小春日和の一日、畑仕事も一段落、帰り際に友人から珍味の秋採りの「ウド」を頂戴し、夜の晩酌を楽しみに家路を急ぐ。早速準備足りなく用意完了。うまい地酒を人肌爛にし、準備完了。杯を手にした瞬間にぐらぐらと激しい揺れが続いた。新潟地震を経験しているが規模が全然違うと直感した。

幸い家族全員直ぐに外にとびださず、事態を見守り一室に集まり余震を考えながら非常食袋を準備するが、2回目の余震のほうがるかに大きく家族全員旧小学校校庭に避難した。町内の皆さんも大勢集まりシートを敷き恐怖におののきながらも皆冷静であった。数時間が過ぎると空腹を感じるも家に戻れず、役員他で米、野菜を調達。ベテラン主婦のお陰でおにぎり、味噌汁を振る舞いみんなで飢えをしのいだ。

夜は40~50台の自家用車が並びその中で仮眠し、一週間ほど続いたけど次第に台数

も減り始めた。県内外からの善意ある食料が届き、朝、昼、夜と役場に取りに行った。幸い安浄寺さんの伏流水を命の絆として頑張ったこと。役員と労苦をともにしたこと。町内会長の「非常時のときこそわがまは言わない」の一言が忘れられない。ライフラインが麻痺すると、普段の生活がこんなに弱いものかと思った。今度の災害以後、今までよりなお一層町内が深い絆で結ばれたことに感謝している今日この頃です。

(当時・協議委員)



青山重雄

その日、川口温泉に行き帰宅後、早めの夕食を済ませ居間でテレビを見ていた。突然、ものすごい音とともに大きく突き上げ縦揺れが襲い、これは大きな地震と直感し、動くことも出来ず、大きく揺れる蛍光灯を見上げながら、どの方向に倒れるかと身構えた。台所で食事の後片付けをしている妻に大声で呼びかけると「テーブルの下にいる」と声がした。「動くなよ」と叫んだ。建物のきしむ音、食器、家具のすさまじい音の中で、生きた心地がしなかった。外に出ようと台所の割れ物の山の上を、静かに歩き外に出る。軽トラックで農道に避難した。余震も少なくなり軽トラックで町内見回をし、倒れた家もなく、安堵し資料館へ行くと、グラウンドに大勢の人達が避難されており、建物の中はお年寄りが所狭しと大勢おられた。その夜から連日、午後10時、午前1時の2回、体調または火の用心と思い、見回りを始めた。朝7時には本部から電話で寝泊り何名、グラウンドでの避難自動車何台と連絡する。また、役場に各地区毎に積まれた避難食作業に、朝、昼、晩の運搬、区分け、配布の作業は大変だった。役員はもとより、各班長さん、町内の大勢の皆様からボランティアをいただいた。この震災で

中町内の皆様が、心を一つにして協力いただいたことが本当に心強く、いい教訓となった。是非この教訓を今後の町内の活動に活かしていただくこと心から願います。

(当時・中町内会長)

編集後記

- 原稿を見させていただき、目頭が熱くなったことは数え切れませんでした。年とともに涙腺が緩んできたばかりではありません。また、いざ困難な事態に遭遇したときの人の心の豊かさを表現した記事に接すると「嗚呼！」と感心させられました。そしてなりよりも心身ともに「負けないぞ」「復興するぞ」の力強さはまさに雑草です。そして隣近所、町内、仲間、親戚の励ましあい、協力で「人は生かされているんだなあ～」と思いました。
- 表紙の「中越地震・絆」の題字については、老人会会長・永井力さんをお願いしました。ありがとうございました。
- 記事提供者 71 名。記事を読ませていただきながら当時の役員の青山会長、永井順二郎さん、故・番場尚さんのご苦勞に頭が下がります。町内の皆さんが本当に感謝していることがひしひしと伝わってきます。心から感謝し、その苦勞を決して無駄にすることなく、「今後の町内の運営に生かさなければ」と、感慨を新たにしました。
- また、子供さんからも原稿など協力をいただきました。今後、人生の節目で思い起こしていただき、成長の糧にしていればと思います。
- なお、是非は別にして、文章の区切りや、「です。ます。」「である。」などの統一、短文の場合など、原稿内容の趣旨を踏まえつつ、若干の加筆させていただいた部分があります。ご承知おきください。
- 「記事提供者名」は、奥さんや、子供さんの名前での投稿もありました。「誰？」などの疑問もありますが、個別に対応させていただき記載のとおりとさせていただきました。また、記載順序につきましてもアイウエオ順など検討しましたが、深井英一さんにトップを切ってもらい、町内会長と前役員と関係者の投稿を最後尾にし、そのほかはほぼ同時期に提出いただいた原稿の、パソコンへの投入順序とさせていただきました。チョット探しづらいかもかもしれませんがご了承ください。
- アンケート提出者は 75 名でした。プライバシーの関係もあり、100%の集約とはなっていません。やむを得ないことと判断しました。
- また、アンケート、記事投稿は自由という

ことは承知しています。が、役員として「投稿で記録を残す」との熱意から、「強制」「しつこい」などの受け取りをされた方もおられましたらお許しください。

- 特に誰とは書きませんが、写真の提供ありがとうございました。
- プラン作成にあたり小さな町内の取り組みにご理解いただき、印刷を引き受けていただきました(有)佐藤印刷所さんに心から感謝申し上げます。他に、2社の印刷会社から相談に乗ってもらいました。特に名前は掲載しませんがご迷惑をおかけしました。あわせてお礼申し上げます。
- また、長岡市役所本庁、越路支所からは地震関連の施策など、いろいろと相談にのっていただき助言を戴きました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。本当に助かりました。
- 最後に、町内の皆様のご協力に感謝しつつ、発行に携わり、「再生プラン」発行にこぎつけることが出来たことに心底喜びを感じます。困ったときに手を差し伸べていただけるということは、お互いの日頃の付き合いがあるからだと思います。あらためてそのことを肝に銘じ、日常生活を送りたいものです。今後益々中町内会が、「何事にも理解しあい、協力し合いながら事に当たる」。そんな町内であり、その伝統が引き継がれていくことを心から祈念いたします。本当にありがとうございました。

平成 19 年 3 月 吉日

中町内会長・永井栄弘
協議委員・宮川 清
協議委員・深井幸一
特別委員・永井紳一

平成 19 年 3 月吉日
「地域コミュニティ再生プラン」
中町内（長岡市来迎寺元町）

発行 新潟県長岡市来迎寺
来迎寺元町・中町内会
会長 永井栄弘

印刷所 有限会社 佐藤印刷所
長岡市宮内 8 丁目 8 番 11 号
TEL 0258-32-0681
FAX 0258-37-1577

